

# 外国人教師

—「北の外国語学校」を支えた人々—



F. W. ステッドマン  
(在職/明治44年~大正2年)

英語担当。開校と同時に赴任した最初の外国人教師。公的な「外国人教師」ではなく、「囑託講師」として任用されたようである。開校時日本人教授スタッフは9名しかいなかったことから、小樽高商の外国人教師にける並々ならぬ意気込みが見て取れる。



C. N. スミルニッキー  
(在職/大正11年~昭和23年)

ネフスキーの後任ロシア語担当。熱烈な帝政主義者だったが、人権を抑圧する国家主義には批判的だった。戦時下では些細な反戦的言動により送検され罰金刑となったが、戦後も教鞭を執り続けた。小樽の地に没した唯一の外国人教師。



大黒マチルド

(在職/昭和6年~昭和33年)

フランス語担当。本学で最も長期間に亙り在籍した外国人教師。非常勤講師であったが、後に北大の専任講師になる。札幌市北区に現存する「大黒胃腸病院」初代院長夫人。従って国籍は日本人であり、講師料も外国人待遇を受けることができなかったため、学校が文部省に外人登録し手当を増額した。後にフランス政府が文化人に贈るバルム・アカデミック勲章を受章した。

明治政府は、先進技術を輸入するために、多数のいわゆる「お雇い外国人」を欧米から招聘しましたが、官立学校に赴任した彼らは「外国人教師」と呼ばれました。小樽高商の外国人教師達もその流れを汲むものです。先々号で紹介したフランクの記事でも触れましたが、彼らの俸給は非常な高額で、大臣給与にも匹敵したといわれています。そのため、各学校はむやみに外国人教師を雇い入れる余裕などありませんでしたが、小樽高商は渡辺龍聖初代校長の辣腕により、精力的に外国人教師を採用していきました。他の高商では通常2名ほどであった外国人教師が、最盛期(昭和10年)には7名在籍しており、戦前在籍した教員224名中、外国人が実に36名に上ることからも、小樽高商の洋学吸収・語学教育にける熱意が窺えます。ただし、厚遇を受ける正式な「外国人教師」は欧米系に限られており、中国・ロシア人教師は学校が独自に採用する「囑託講師」として給与も4分の1から2分の1程度に抑えられていました。ネフスキーも小樽高商での身分は囑託講師です。彼らは実践的な語学教育に尽力し、中でも彼らの指導する年1回の外国語劇は「小樽高商の華」と呼ばれ、市民の人気を博しました。そして授業以外にも、彼らの多彩な人生観、世界観は高商生を深く感化していったのです。第二次世界大戦下では、迫害を受けた外国人教師たちも少なからずおり、帰国した後も彼らにバラ色の人生が待っていたわけでは必ずしもありません。人件費の高い外国人教師は、時に世間から批判されたりもしましたが、母国を遠く離れた極東の教壇に立つことは、彼らにとってやはりひとつの冒険であったわけです。



スミルニッキーは小樽で最初に自家用車を購入したと言われている。彼の車は高商生にも人気があった。



D. マッキンノン

(在職/大正6年~昭和17年)

英語担当。ロバをペットとする「ロバ先生」として有名。しかし日本が満州事変に突入する前から当局より要注意外国人として監視され、太平洋戦争開戦日朝、授業中に教室で検挙された。厳しい取調べの後、翌年アメリカへ強制送還され、家財は全て没収された。ネフスキー、フランクに並び、戦争に運命を翻弄された悲劇の外国人教師である。



J. A. デーゲン

(在職/大正9年~昭和6年)

フランス語・ドイツ語担当。小樽高商は「国際的なビジネスマン」を育成する意味合いから、話者が世界中に存在するフランス語やスペイン語、或いは中国語を積極的に教授した。この点が、第二外国語として圧倒的にドイツ語を重視した旧制高校と決定的に異なっている。

スイス人であるデーゲンは英語にも堪能で、学園讃歌“Green Hill Souvenir Song”を作詞・編曲している。



R. ストリー

(在職/昭和12年~昭和15年)

英語担当。帰国後オックスフォード大学セント・アンドリュース校で日本研究にいそしみ、日英交流の促進に多大な貢献をした。平成4年には彼を記念した講演会が本学で行われている。